



Title	献辞
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	経済學研究, 41(4)
Issue Date	1992-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31893
Type	bulletin (article)
File Information	41(4)_Piv-v.pdf



[Instructions for use](#)

献 辞

17世紀科学革命の洗礼を受けたウィリアム・ペティーは統計学の古典として知られる『政治算術』の序文で従来のスコラの学問に見られた形而上学的方法にかわる新しい方法つまり経験的・数量的方法を呈示したのであった。この方法的立場は19世紀に入ってオーギュスト・コントの実証主義の方法に受け継がれ集約されるに至る。コントによると「実証的」という言葉には「現実的」とか「相対的」などとならんで「正確さ (le certitude)」および「明確さ (le précis)」の意味が込められているという。

近代科学の方法に要求されるこの「確実さ」と「明確さ」を血肉化し、それらを人格の一部にまで取り込まれた是永教授は、今春3月、定年を迎えられ、わが経済学部を去られる。

教授は1962年に提出された学位論文「経済学研究における数学的利用の基礎的条件に関する研究」で、量的関係と空間的形態の学問である数学の本質を明かにし、この解明をもとに、経済学に数学を適用する際の問題点を示された。すなわち、経済学における数学的論理学と確率論的手法の検討を通じて、そこでの数学利用の問題点を明らかにされたのであった。今日、エレクトロニクス技術の発展と、その応用によって社会科学における数学的方法の利用とその意義にかんする研究は、ますます重要となっている。その意味で、教授のこの御研究は先駆的なものであった。

このようなお仕事からも窺えるように、教授は統計を実証的な社会経済研究のたんなる技術的手段という観点から見のではなく、特殊な仮説演繹法としての統計的推論と帰納法との関連を通して、統計の技術的手法に含まれている「本質的」意味を追究する姿勢を保持してこられた。このことは教授の多くのモノグラフを通じて確かめることができるであろう。このように教授の御研究は一貫して、いわば科学方法論の観点からすすめられてきたのであった。

教授は1954年以降現在まで、日本統計学会と経済統計学会、そして1970年からは International Association of Survey Statisticians の会員として活躍され、1974年から現在まで日本統計学会の評議員を、同じく1990年からは経済統計学会の代表運営委員(会長)を務めておられる。

また1982年から85年までの3年間は日本学術会議(地方区)の第13期会員として、「資源・エネルギーと科学技術にかんする特別委員会」に所属され、石炭産業振興や産業構造変化の将来展望の問題などを手がけてこられた。

このように教授は学内外の研究活動に深くかかわってこられたのであるが、ここで、学内とりわけ経済学部内の研究活動を推進された事実の一端を紹介しておきたい。それは、教授が助手時代、毎週土曜日の午後に開かれた統計学研究室での「土曜研究会」、通称「土研」の発展の基礎を築かれたことである。1950年代から60年代にかけて、当時、長屋と称されていた古い木造校舎の一隅にあった内海教授の統計学研究室に、限られた範囲ではあったが、学部内外のさまざまな専攻分野の大学院生や研究者が土曜日毎に集まり活発な議論をたたかわっていた。そ

の頃、助手を務められていた教授は、この研究会の裏方として、その運営に努力され、研究会としては稀にみる長期にわたる継続の基礎をつくられたのであった。なお、この研究会は爾来30有余年にわたり東京在住の本学部出身の研究者たちによって「東京土研」として継承され今日に至っている。

さて、教授は北海道大学法経学部を卒業され、旧制の同大学院を終了後、すでに触れたように経済学部の助手として5年間勤務された後、法政大学経済学部に転じられたが、1971年再び母校に戻られる。以後、20年余にわたり教授は、わが経済学部で研究と教育に専念され、多数の学生を社会に送り出してこられた。その間、1984年から2年のあいだ経済学部長を務められ、さらに本学のスラブ研究センターの協議員ならびに運営委員会委員として同センターの発展に寄与された。

このように教授は学内行政と学部の発展に幾多の足跡を残されてきたのであるが、なかでも、わが学部にたいする教授の功績として忘れてならないことは、同窓会の発展に大きな貢献をなされたことである。教授は、すでに学部長時代から同窓会との関係の深化に尽力されていたのであるが、部長の任期が明けた後、それまでの不十分な同窓会名簿の改訂作業に着手され、5千人近い卒業生のうち、非常な御努力によって、約3千におよぶ人数についての情報を収集され、1989年ついに「北海道大学経済学部同窓会名簿」第2版の出版を実現されたのである。この出版は、わが学部の同窓会にとっては画期的な出来事であった。というのは、名簿の販売によって財政基盤が確立し、また名簿作成の過程で事務局も設立され、経済学部同窓会は創立以来はじめて安定的な基礎をもちうるようになったからである。その名簿の第3版もまた教授の御努力によって、教授が退官される時期と相前後して上梓されると聞く。教授が学部を去られるに際して遣して下さるその第3版を、われわれは深い感謝の念をもってお受けするであろう。

以上、謝意の表明と今後の教授の御健康とを祈念して粗辞の結びとする次第である。

1992年3月

北海道大学経済学部長 佐藤茂行